

キリシタンの世紀における「マリア十五玄義図」

—イエズス会作品の役割と様式の源泉について—

小谷 訓子 (大阪芸術大学)

イギリスの歴史学者チャールズ・ラルフ・ボクサーは、聖フランシスコ・ザビエルが来日した1549年から、ポルトガル王ジョアン四世が徳川幕府からの最後の文書を受領した1650年を「日本におけるキリシタン世紀」と定義した。

本発表は、その「キリシタン世紀」の日本において制作された二つの「マリア十五玄義図」を取り上げ、イエズス会が作品に課した役割と、様式の源泉という二点について議論する。手続きとしては先ず、現存する「マリア十五玄義図」の東家本と原田家本の詳細を分析し、作品がその当時イエズス会から出版された『ドチリイナ・キリシタン』と深く関連していることを確認する。そしてそれらが共にイエズス会巡察師アレッサンドロ・ヴァリニャーノの掲げた布教政策である「適応主義」を体現することを指摘する。「適応主義」とはキリスト教の慣例を現地の慣習に適応させ、結果としてキリスト教の教理や理念の普及を促す布教戦略であり、日本にもヨーロッパとの文化融合をもたらした思想である。東家本と原田家本は、構図や様式などが類似し、共にイエズス会士の肖像とIHSのモノグラムを表すため、イエズス会の教義を絵解きする啓蒙的な役割があったと考えられる。

日本は「キリシタン世紀」以降、鎖国や禁教を経験していることから、現存する二作品は礼拝や儀式に用いられたこともあったかもしれない。しかしながら、今回の発表では「マリア十五玄義図」の本来の役割、即ち教育的な機能に焦点を絞って論じることとする。この二作品は、和風の掛軸として設けられたフォーマットに、ヨーロッパの絵画技法を用いながらも、当時の日本絵画に見られる輪郭線を基調とした細部表現がなされるなど、独特の様式を持つ。発表者はこれを「適応主義」のもたらした文化融合の例証として論じる。

「マリア十五玄義図」の独特な構図については、曼荼羅に似ていることから、ゴーヴィン・ベイリー等によって和風、ないしはアジア風だと指摘されてきた。しかしながら、発表者はその源泉を16世紀イタリアのマリオ・カルターロやアントニオ・テンペスタの版画にたどることができた。つまり本作品の構図は、「キリシタン世紀」においてインド洋経由でヨーロッパから日本に渡来した舶来物に由来するのである。さらに、東家本も原田家本も中央に古ポルトガル語が記述されていることから「マリア十五玄義図」は、イタリアの構図、ポルトガルのテキスト、そして日本の掛軸フォーマットを持つ、入念でバランスの取れた文化融合の結晶であるといえる。これは偶然の産物ではなく、正にイエズス会の、とりわけヴァリニャーノの意図を反映する絵画である。このような本図は、キリスト教教化運動の為にイエズス会のセミナリオで数多く制作されたが、禁教時代にほぼ全て破壊された。その江戸時代のイコノクラスムを生き延びたのが、現存する二作品なのである。